

# 北海道ちよつと暮らし

## 2泊の移住体験

### 厚真町

北海道・厚真あつち町が募集した「北海道ちよつと暮らし体験」に参加した。9月13日14時に新千歳空港に集合し、15日14時に同空港で解散する2泊3日の田舎暮らし。初秋の「北の大地」は、稲穂や豆畑がヘクタール単位で青々と広がり、行く先々で提供されたトウモロコシ、カボチャ、スイカ、搾り立て牛乳は、本州とはひと味もふた味も違っていた(小村 滋)

新千歳空港からバスで約30分、宿舎の厚真町営こぶしの湯に着くと早速、町が売り出している住宅団地ルーラルビレッジに案内された。舗装された道の両側はカラマツ、シラカバ、ミズナラ、カエデ。原生林のようだが、本州と違ってジメッとした暗さはない。「広いねえ」隣が見えない「感嘆の声。丘陵地の地形そのままに、森の中の住宅地は1区画10000平方メートル前後で約450万円。2800区画の大半は

### 食は豊かで敷地も広々



既に売れ、96区画に約2000人が住む。その中の一軒を訪問。東京で大学教授をしていたNさんは7年前に移住した。370坪の敷地の小高いところに平屋の住宅。奥さんが丹精こめた庭は花があふれ、その片隅の陶芸窯で焼いた作品を見せてもらった。東京にも家を残り、年数は往復する。2日目の朝はジャガイモ掘り。昼食のジンギスカンで「北の恵み」を実感した。バーベキュー施設は公園など町内敷力所



▲1区画1000平方メートルの分譲地  
▶豪華バーベキューに舌つづみ



### 残る不安は医療と積雪

にあり、いずれも無料だ。町内産の炭火に、味付けされたラム肉を並べる。ジュージューと音を立てて脂が落ちる。ビールはなくとも肉は口から胃に流れ落ちる。朝取りトウモロコシが甘い。貝殻に載ったホタテ貝が溶けたバターの中で踊る。軍手を付けた手で貝殻を引き寄せ、厚さ3センチはある貝柱にかぶりつく。熱い、甘い、うまい。ホタテ貝は厚真の浜で穫れる。ホッケ、イカが香ばしい匂い。上げ、火の中でアルミ箔に包まれたジャガイモが焦げる。腹いっぱい食べて草むらに仰向けになる。白い雲、澄んだ空。「こころ食糧危機は無縁かも」満腹の後、アイヌ遺跡の発掘現場へ。バスは厚真川を遡って厚真ダム工事現場に着いた。道内では比較的温暖な気候の

### 安平町はディープの里

実は2日早く北海道に入り、空港から厚真町への途中にある安平(あひら)町でも2泊の移住体験をした。06年3月、早来町と追分町が合併した町といえはうなずく人も多

早来町は優勝の故郷、競馬ファンの聖地。町には「お帰りのさいにディープリンパクト」の看板と名馬ディープリンパクトの人は今も衰えない

### ゴルフ場も7コース

無敗の「三冠馬」のポスターが貼られ、早来駅の物産館にはディープ・コーナーまである。9月の週日、種付け牧場の社台スタリオンステーションには本州から来た車やレンタカーが目立った。見学者席には100ほど離れた所で草をむくディープに見入るファンの姿が途切れない。他にもテニスポイントが眠る吉田牧場やマルゼンスキーを生んだ橋本牧場がある。

追分町は明治時代、室蘭本線と夕張線(現石勝線)の分岐点「追分駅」が地名になった鉄道の町。戦後に追分村として独立、最盛期は人口8000のうち8割が旧国鉄職員と家族だった。町の鉄道資料館にはD51が展示され、訪れた日は月に2回、SL保存協会が見学者に説明する日だった。国鉄機関士時代のブルーの制服を着た会長の阿部好次さん(82)が「SLは生き物、機関士の腕が問われたものです」とまるでサラブレッドをなで

るように説明していた。安平町は、新千歳空港から車で15分、札幌にも1時間弱の交通の便。町内にはゴルフ場が七つあり、「ゴルフ仲間とバカンス移住」もお勧めだ。そば栽培農家直営の手打ちそば店、日本のチース発祥の地でチーズをつくる工場直営のレストランなどもある。3LDKの元町教育長公舎を「ちよつと田舎暮らし体験」用に貸している。

◆安平町まちづくり推進課は☎0145・22・2514。  
◆厚真町まちづくり推進課は☎0145・27・2321。